

流浪へ ローマに捧ぐ

白んでいた東の方^{かた}には雲はいなかった

僕は

今か今かと暑い朝日が射し込むのを待っていた
けれども遂にそれはやって来なかった・・・

こんな朝は初めてのことだった

みずみずしい哀しみがカーテンをそよぐと

僕は

椅子にもたれたまま迎えた朝を思い出した

西からの新たな雲は

僕が窓から身を乗り出した時には

既に東にまで

空全体をうっすらと覆いつくしていた

僕は感じ始めていた

この哀しみが既に己のものであることを止め

ありふれた、しかも息苦しいものとして

辺りに漂いだしていることを

それは漂い拡がるにつれ

次第次第に薄められてゆくだろう

そして・・・、もしかしたら

僕はその香りを逆に追い掛けることになるかもしれない

(1990.8.6)